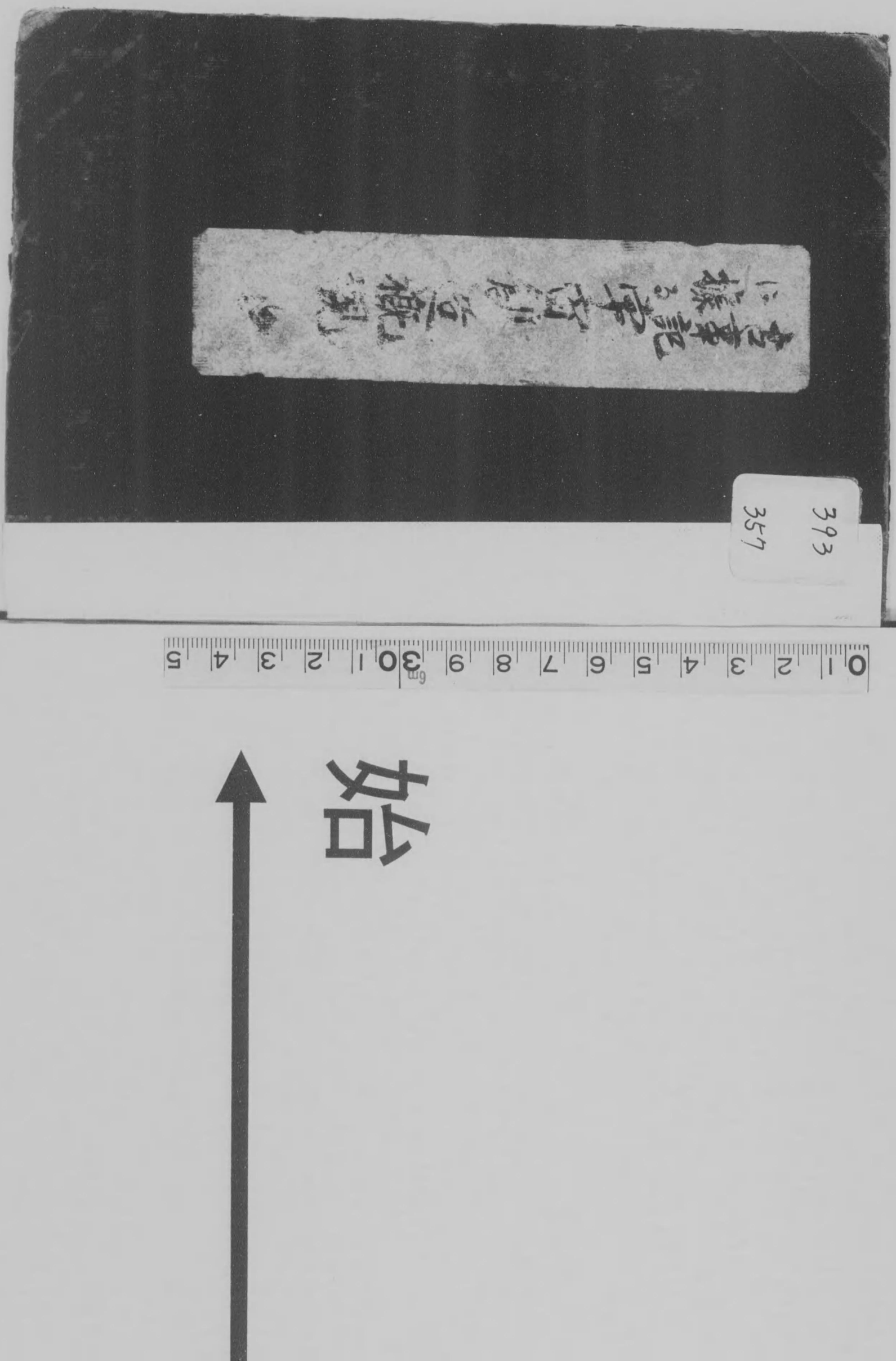

393
357

古事記
に據る

宇宙創造概觀

贈呈

357
393-249

浅野正恭著

古事記に據る

宇宙創造概觀

著者ノ寄贈本

大正
11.5.8
寄贈

誤	正		誤	正
十九	十四	頁	十	晨
十四	十	行	九	日
八	一		一	過がぬ
二	二		二	礫
四	七		四	礫
礫	礫		礫	礫
過ぎぬ	過がぬ		日	晨

はしがき

皇典古事記は、宇宙の始源、天地の大法則を、神話的形式を以て、人間に垂示された神啓である。故に、之を眞解することを得ば、世事人事百般に對し、惑ふことなく、迷ふことなき指針と爲るのであるが、其の神話的形式中より、天則、神意、哲理といふやうなものを求むること、決して、容易の業ではない。のみならず、其の眞解し得たとするところのものも、亦各人の分相應に過ぎざるものとなるべきが故に、必ずしも、一の說を以て、他を律するといふ譯には往かぬ。されば、古來幾多の學者が、其の研鑽に從事したのであつたが、古事記の眞解は、是れ以外に出づることを能はずとすることを得なかつたのは、寧ろ當然である。宇宙其

物が神祕である以上、古事記は、未來永劫、之を闡く鍵が、各人に委せられてあるのかも知れぬ。

私は、曩に、「神の科學的研究一班」と題し、古事記に關する一葉の表を作成し、之を公にしたことがあつたが、彼の表丈けでは意の盡せぬところもあり、又多少訂正を要する點もあるので、此に再び同一問題について、筆を執ることにしたのである。が、勿論之を以て最後の研究とする譯には往かぬであらうと思ふ。尙大方の指敎を得て。後日改訂の機あらば、私の幸之に過ぎずであります。

大正十年十月二十日

著者誌

目次

一、靈と體　一頁
二、造化の三神　八
三、天地の剖判　十七
四、萬有の發生　廿四
五、世界の統治　卅
六、餘論　卅五

古事記に據る

宇宙創造概觀

淺野正恭稿

(一) 靈と體

靈と體、其の正體果して如何。靈と體なる語は、日常使用されては居るが、未だ具體的說明がついて居らぬやうである。私が、爰に此の研究を進むるに當り、先づ第一に決定せねばならぬのは、此の靈と體との定義である。此の定義を決めずに、私の研究は一歩も進めることが出來ぬ。故に、私は先づ之れが解決を試みねばならぬ。

凡そ宇宙間に存在する森羅萬象、萬有一切は、千差萬別、多種多樣、幾んど窮極を知らざる觀を呈して居るが、然しながら、或る意味に於ては、之を机上

に駢列し得とも言ひ得る。何となれば、宇宙の萬有一切は、悉く八十有餘の元素に歸着して仕舞ふから、化學實驗室の試驗管は、宇宙萬有の根元を包藏するものとなるからである。地球以外の天體中には、地球上にて求め得たる元素の外に、尙幾多の元素があるかも知れぬが、未だ其れが發見せられたといふことを聞かぬ。故に、宇宙間に於ける一切は、八十有餘の元素から成立して居るものであるといひ得る。若し後日地球上から、乃至は他の天體から、幾多の元素が發見せらるゝに至つたとしても、私は其の元素の數の多少に重きを置くものではないから、私の研究の歩を進めんとするのに、何等の支障を及ぼすものではない。元素の數が增加すれば、私が今八十有餘とせるのを、增加せるだけの九十なり百なりに訂正すれば、夫れて可なりである。

此の八十有餘の元素は、ラヂユームの發見以來、電子より成立するものであることが明らかにせられた。此の電子なるものゝ組織は、陽電氣を核心とし、

一箇乃至數十箇の陰電氣が、或る一定の軌道を畫いて、大速度を以て、此の核心の周圍を廻轉すること、宛かも太陽を中心として、幾多の惑星が、其の周圍を廻轉して居るのと、其の趣を同じふして居るといふ。

元素、電子が、斯決定されたところで、私は思ふ、宇宙間の萬有一切を、何等かの方法に依つて、悉く之を元素に還元し得たと假定するときは、宇宙の萬有は其形を沒し、唯混乎たる八十有餘の元素のみとなつて仕舞ふてあらう。此の元素を更に還元して、電子のみと爲し得たと假定するときは、宇宙間には、所謂物質なるものが皆無となり、唯邊際を知らざる、電子のみ充滿せる空間となり終るであらう。然るに、此の電子なるものは、陽電氣(十)と、陰電氣(一)との結合せるものなるが故に、此の各種の電子は、更に之を還元して、單なる(十)と(一)とに分解し得る筈である。此の(十)と(一)とは、其性質の異なること、極度の正反對であるが故に、此の(十)と(一)とを生ぜしむるところの、本體なるものが、必ず

存在するに相違ないとの推斷を下し得る。此の本體なるものは、取りも直さず、全然正反對の性質を具備せる、即ち十と一とを兼併せる土てあらねばならぬことは、何人も拒否し得ぬ必然事てあると思ふ。即ち宇宙は、其の無始の始源に遡るときは、終に混沌中和の土一元に歸着して仕舞ふ。

以上の如くにして、宇宙は之を土の一元狀態に遡求し得たのであるが、是れより、此の始源狀態を發足點として、萬有生成の順序を、私は新に考察せなければならぬ。

中和混沌たる一元の土が、發して萬有となる第一段の徑路は、どうしても、十と一との立別てあらねばならぬ。相反する二性の對立てなければ、そして此對立せる二性が相互交渉するのてなければ、何事も成し得ざるは、最も明瞭なる事實に推して、然りとせざるを得ない。例へば、下なくして上は有り得ず、右なくして左は有り得ず、惡なくし善は存在せないと同樣、相反せる十一が無

ければ、萬有は成立し得ない。是れ萬有の發生に、十と一との立別が、第一段の徑路を爲さねばならぬのである。然らば此の十と一との立別が、如何にして遂行せられたりやといふ問題になると、之れには、二樣の解釋を下すことが出來る。第一は、一元たる土の綜合意思精神の發動せる結果となすもの、第二は、自然の傾向が、さうなつたのであるとするもの、以上二種の解釋を下すことが出來る。然るに、第二の解釋は、所謂解釋にあらずして、唯外面皮相的に觀察したといふに過ぎぬ。例へば、玆に水素と酸素とがあつて、其れが化合して水となるのは、自然にさうなるのてあるといふのでは、何等の解釋を與へたものてはなく、唯其の現象を說いたまゝであるから、私は、其の此なるのは、水素と酸素との意思精神、換言すれば、水素と酸素との性狀の發現が、水を成すに至るのであるとするものてある。爰にいふ所の性とは、意思精神の特徵を指すのてあつて、凡そ物（物といふも獨り物質のみの謂にあらず）なるものが存在

する以上、性なきものは有り得ない。既に性がある以上、何等かの現象を起さずに終るといふ事は、想像することが出來ぬ。此の如くして、一元の(±)は、其の意思精神の發動によつて、(十)と(一)との二元に立別けられたのである。即ち、私は第一の解釋に從ふものであつて、之れは如何なる場合にあつても、然か解釋するのを、私は至當と信ずる。今、一つの好例を引用して來らんに、例へば爰に電池がありとするに、電池の性は、電流を起さんとするのであるが、其の未だ兩極を接せざるに當つては、(十)の電流も、(一)の電流も無論起つて來ない。起つて來ないけれども、(十)(一)の電流を起さんとする性を、具備存在するものなることは爭はれない。(十)(一)の未だ起らざる電池は、一元の(±)なる狀態に在りといふべきであつて、宇宙の一元狀態も、亦當に此の如きであるべきであらう。即ち宇宙第一次の意思精神は、(十)と(一)との立別けであつて、此の立別けられた(十)を、私は之を靈と呼び、(一)を體と呼稱するものである。そして、宇宙萬有

一切は、靈と體との結合醞釀に外ならずと結論するものである。之を靈と體とに對する、私が下すところの第一次の解釋とする。此の靈と體とは、別に、陽陰、火水、男女等と稱することがある。

因に言ふ。基督教にて十字を用ふるのは、基督が磔刑に處せられたる、其磔架の紀念とするものがあるやうであるが、私は、此の十字なるものは、靈と體との結合、即ち(十)と(一)との結合を意味して居るのであると思ふ。私共は便宜上、陽、火等の符號として、(十)を使用するのであるが、此の符號は、寧ろ(|)を以て足れりとすべきであつて、此の(|)を(十)と記號するのは、(一)と混雜する憂を防ぐ、便宜の手段に外ならない。斯くて十字は、(十)と(一)との結合せる表象となる。尙十字なるものは、時間の表象たる(|)と、空間の表象たる(一)との交叉を示すもので、吾人は常に、時間と空間との交叉點に立たせられて居るのであつて、何人と雖も、此の交叉に立つことを免れ得ない。右するも左するも、善を爲すも惡

を行ふも、悟るも迷ふも、瞬時の間と雖も、此の十字を脱することが出來ぬ。此の如くして、獨り基督のみでなく、吾人は此の十字の磔刑を、常に甘受せねばならぬのである。佛教の萬字も亦十字の變形に過ぎぬ。（十と一）とは、常に宇宙の大根源を語つて居るもので、宇宙の大眞理、亦此の以外には出づること無きを、私は痛切に感じさせられて居るものである。

《二》造化の三神

宇宙の森羅萬象、萬有一切は上述の如く、（土）の一元より分れたる（十と一）、（靈）と體との二元より成立するものとなつた。然らば、此の（十と一）、（靈）と體とは如何にして、森羅萬象、萬有一切となつたのであるか。私は思ふのに、萬有既に生成して仕舞つた末端の方から、科學のみを手頼として、チビ〳〵遡來するのみでは、其の機微に觸るゝことが至難である。故に其の指すべき方向は、之を超理性の高所から求めねばならぬ。そして超理性の指針は、古事記の研究に依つて、私は之を求め得べしとするものである。古事記は、はしがきにも述べた通り、神話的形式を成して居るのであつて、單に此の神話的記述としても、世界無類の珍寶とすべきであるが、併し、神話的に優れたものであるといふことが、古事記の眞價ではなく、其の眞價は別に存する。私は、及ばずながら、此方面の研究に志してより以來、宇宙の大眞理が、此の記錄中に包藏されて居ると信ずるに至つたのである。

古事記の含蓄が、此の如く廣大にして神祕たる以上、何人が其の說明に當つたとしても、其の全豹を盡すといふことは、望み得べからざる感あるを禁じ得ない。それを初心の私が、しかも此の片々たる小冊子を以て、之に臨んだのであるから、其の寄與せんとするところのものに、無論多くの期待を持つて居る譯ではない。唯、涓滴尙流れを爲すの微誠を致さんとして、玆に卑見を述ぶる

に過がぬ。

天地の創造は、古事記には、如何に示されてあるか。开は次の通りてある。

天地初發の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に、高御産巣日神、次に、神産巣日神、

凡そ天地は、剖判してから、始めて天地となるのてあつて、未だ剖判せざるときは、勿論、天も地も無い。分れざる以前の天地は、自ら分れざる以前の天地てあつて、特に之を記述するの要がない。故に天地分れんとする時の事を示すことに由つて、天地分れざる以前の事も、亦包含さるゝことになる。是れ古事記が天地初發之時より、記されてある所以てある。故に、爰にいふ所の天地とは、宇宙といふのと同一義てある。宇宙は無始無終てあるが、其の無始の始源に於て成りませる神が、天之御中主神、ついて、他の二神てあらせらる。此の三柱の神が、所謂造化の三神てあらせらる。

此の三柱の神の成りませる高天原とは、抑も何を意味して居るのてあるか。

從來其の解釋が區々に渉りて、歸着が無いやうてあるが、天地未だ分れざる以前に於ては、宇宙は混沌として居る。故に三柱の神の成りませるも、必ずや、此の混沌裡てあつたに相違ない。然り、造化の三神も、此の混沌裡の宇宙以内に生じたものてあつて、決して宇宙以外に生じられたものてはない。此の宇宙内に生じられたといふことを啓示されてあるのが、即ち高天原に成りませると、記されてある所以である。高天原とは、取りも直さず、宇宙其物の義てあらねばならぬ。

高天原なる意義について、更に一言せんに、天地分れんとする時の宇宙其物は、三柱の神に外ならぬのてあつて、宇宙即ち三神、三神即ち宇宙てある。故に、高天原に神つまりますと、祝詞にあるのは、宇宙には、神が遍滿して居るといふ義となる。此の意義が轉化して、神の集合する地點を、高天原と指稱す

るにも至つたのである。爰にいふ高天原は、即ち宇宙其物を指すのであつて、宇宙外といふことを、吾人が意識し得るならば、其の宇宙外は、高天原ではない。

天地初發の時に當つては、宇宙は混沌狀態で、天もなく地もなく、日月星辰もなく、勿論、森羅萬象の起らざる以前であつて、未だ、（十と一）とが分れざる狀態をいふ。（十と一）とが分れざる一元の（十）なる宇宙其物が、即ち靈體一如が、古事記の、天之御中主神であらせらる。天之御中主の天とは、天と地と對立せる天の意義ではなく、宇宙其物の謂である。何となれば、天地未開の時の第一神、獨一神が天之御中主神であらせらるゝが故に、其の天とは、天地對立の天にあらざることは、自明の理であるからである。又、御中主とは、中心主宰の意思精神であるが故に、天之御中主とは宇宙及び宇宙の統合精神といふことになる。

然るに、此の一元の（十）が分れて（十と一）となり、天地剖判して、萬有鬱生せる今日に在つては、天之御中主神は、其の存在を失ふたかといふに、決してさうではない。（十）が分れて（十と一）となり、（十と一）とが種々の電子となり、元素となつたとしても、（十一）は依然として（十一）として存在するが故に、亦依然たる天之御中主神であらせられねばならぬ。（十）一元の混沌狀態に於ける天之御中主神は、之を卑近の例に取れば、宛かも兩極を接せざる電池の如きものならんと、略推測し得べきである。而して森羅萬象鬱然として蒸生せる、現宇宙に於ける天之御中主神は、電池の積極と消極とを接續して、諸種の現象を生起せる電池にも譬ふべきであつて、其の未だ兩極を接せざるときと、其の接せる後とは、勿論其の働を異にして居る。今區別の便宜上、天地未剖判時の天之御中主神を、靜的天之御中主神、剖判後を、動的天之御中主神と申上ぐることゝしよう。

未剖判時の、（十）一元の混沌狀態たる、靜的天之御中主神を、（十と一）との記號

を以て表象し得るならば次の如くてあらねばならぬと思ふ。

静的天之御中主

此の静的狀態より、動的狀態に移らるゝ運機は、前にも述べたるが如く、静的天之御中主神の意思精神の發動に外ならぬ。而して、其の動的となられたる第一次は、高御産巣日神、神産日神の、二神として顯現されたるに始まる。私は此の二神の御活動は、御神名によりて髣髴し得るものと思ふ。即ち、神産巣日神の神或はカとは、窈冥幽玄、隱微の意であつて、結局は内面的といふ義となる。又産巣日とは、結合、醞釀、醱酵、生産といふ意義なるが故に、神産巣日とは、結合、生産が、内面的に遂行せらるゝ義となつて來る。此の意義に依つて、(十)の一元が、分れて(十)と(一)になつたのは、單純なる(十)と(一)とになつたのではなく、其の中に、(十)と(一)との結合、即ち産巣日が包含せらるゝところのものでなければならぬ。そして其結合が内面的であるといふことは、能働的なる(十)が、受働的の(一)よりも、内面に存在することにならねばならぬ。是に於て、神産巣日の結合は、(十)と(一)とによりて表象するときには、大凡次の如き類型をなさねばならぬのであらう。

神産巣日

然るに一方に於て、科學者は、物質元素を研究せる結果、元素は總て電子より成り、其の電子なるものは、(十)を核心として、(一)が其の周圍を廻轉しつゝあるものであることを、證明したのであるから、科學者は、物質の研究に依つて、

我が古事記の、神産巣日の類型の正體を、突き留め得たといふことになる。

次に、高御産巣日の高或はタとは、顯著なる意義を示すものなるが故に、（十）（一）の結合たる産巣日が、外面的に遂行せらるゝを意味することになる。即ち、高御産巣日は、神産巣日とは、表裏内外正に相反するものであらねばならぬ。故に、其の表象は、必然的に、次の如くならねばならぬ。

高御産巣日

産巣日の此の様式は、單に物質を分析還元したのでは、決して得られぬのであるから、所謂物質萬能者の、承認せんとせざるところのものであるかも知れぬ。然れども、既に神産巣日の様式を認めたる以上、之れと全然相反するところの結合たる、高御産巣日の様式を認めざることは、宛かも（一）を認めて（十）を認めざる如きものであるから、其處に一大缺陷があるのを感ぜざるを得ないではないか。私は、古事記の記述に依つて、學術界の探求が、今後必ず此方面を開拓し得るに相違ないと信ずる。即ち、學術界は、今や物質の窮極に到達し得たのであるから、正に靈的方面に突入すべき時機であらねばならぬ。先覺の士は、恐らく此點に着眼して居らるゝことゝ察せらるゝが故に、高御産巣日の探求に對する、私の臆測的見込の如きは、其の具體的ならざる點より、今直に發表することを避けたいと思ふ。

一元たる天之御中主神が、動的狀態に移られたる第一次は、高御産日神の靈と、神産巣日神の體との二元となり、靈體結合醞釀して、萬有玆に並び起るに至る。

《三》天地の剖判

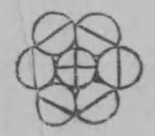
混沌中和の（十）（十と一）とに分れたのは、やがて天地の剖判となるのであるが、是れ唯第一次の階梯に過ぎぬのであつて、（十）（十と一）とに分れたのみでは、天地の剖判といふ譯には往かぬ。是に於て、靈と體たる高御產巢日神、神產巢日神は、更に複雜なる產靈を遂げねばならぬ。古事記に記されて居るところは、次の通りである。

國稚く浮脂の如くして、久羅下那洲多陀用弊琉の時、葦牙の如く、萌え騰る物に因りて成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神、次に天之常立神、

此の二神は、共に、高御產巢日神、神產巢日神の、結合、親和、產靈の結果たること勿論であつて、其の結合の組織は、尙極めて幼稚であるのを免れない。幼稚ではあるが、既に靈と體とが結合せる以上、酸酵醞釀して、何等かの生產的萌芽とならざるを得ない。酸酵醞釀は、外面的にも、內面的にも、猶、高御產巢日神、神產巢日神に於けるが如く行なはるべき筈である。其の外面的醞釀の行はるゝ無邊の邊際の範圍內が、宇宙其物であつて、此の無邊の邊際內は、故に、一の恒久不變體と稱し得べきである。體なるものは既に述べたる通り、內面的醞釀の生ずるところのものなるが故に、今簡單のため、⊕を以て、高御產巢日神を表象し、⊕を以て神產巢日神を表象するときは、宇麻志阿斯訶備比古遲神、天之常立神は、次の如きものとなつて來る。

宇麻志阿斯訶備比古遲

天之常立

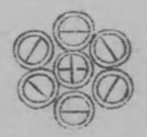


靈と體とが結合醞釀して、萌え騰るものがあるといふことは、一面に於て、自然沈滯するものゝあることを示して居る。萌え騰つて無邊の邊際たる天が定まり、沈滯して所謂地を成す。爰にいふ所の地とは、天に對する地であつて、日月星晨其れ自身よりするときは、亦一の地たるに外ならぬのであるが、吾人

人類としては、此の天に對する地を、差當り地球に局限する方が便宜で、又それで十分であると思ふ。而して此の地の地球は如何といふに、是亦靈體結合の結果に外ならぬことは、上述に依つて明白であらねばならぬ。其の靈と體とは、國之常立神、豐雲野神に外ならずして、地の萬有一切は、此の二神の結合に因らぬものは無い。國とは組織の意、常立とは不變の義なるが故に、國之常立とは、恒久不變の組織を意味することゝなる。恒久不變の組織とは、靈の別稱に外ならぬ。

雲野とは亦組織の意義、豐とは豐富の意なるが故に、豐雲野は、多種多樣の組織體の義となる。即ち國之常立は靈、豐雲野は體で、此の靈體の組織は、高御產巢日神、神產巢日神、比古遲神、天之常立神の結合親和の結果、生成せられた神であつて、地の萬有一切の始源となられたのである。「今前例に依り、(十)(一)を以て此二神を表象するときは、次の通りとなる。但し⊕は高御產巢日神系の組織、⊖は神產巢日神系の組織を示すものとす。

國之常立



豐雲野

物質の元素を還元するときには、電子となること前記の通りであつて、其電子なるものは、陽電氣を核心とし、陰電氣が其の周圍を廻轉するものであるが、其陽電氣なるものは、普通の場合に於ては、⊕の如き複雜なる組織を有し、陰電氣は⊖の如き複雜なる組織を有するのであらうと、私は思惟する。即ち物質を還元して得らるべき電子なるものは、此の豐雲野の組織に達するに過ぎぬことゝなる。從つて靈の基本組織なるものも、亦國之常立であらねばならぬことに歸着する。

上來述べたる神々につき、其の性質を、一應爰に解釋するの要がある。此の

點に關する古事記の記載は、甚だ簡單である。曰く、

天之御中主神、高御產巢日神、神產巢日神、此の三柱の神は、並獨神成りまして、隱身也。

とあるに過ぎぬ。次に、宇摩志阿斯訶備比古遲神、天之常立神、此の二柱の神も、次に、國之常立神、豐雲野神、此の二柱の神も、何れも皆、獨神成りまして隱身也と記されてある。獨神隱身といふことが此く各別に記されてある意味は、畢竟其の獨神隱身たる程度の差を示すもので、其の程度の差を表示するに、他に適當の方法なきため、同一文字を使用せるものならんと察せらる。何れにしても以上の神々は、獨身たることに於ては、同樣なのである。獨神とは、獨立に存するの義にして、即ち高御產巢日神は、靈として獨立に存在し、神產巢日神は、體として獨立に存在活動し得る謂である。換言すれば、末端の所謂靈體關係の如き拘束羈絆を超越して居るといふのである。比古遲神、天之常立神亦然り、國之常立神、豐雲野神亦然りて、但其の組織が上來述べたる如く、大いに其の程度を異にして居るに過ぎぬ。

以上の諸神を私は便宜上、靈と體とに區別したのであるが、今直に其れが靈と體とであるといふのではない。降つては、靈と體とを爲すべき始源なりとの意である。即ち(十)を靈、(一)を體と呼稱したのであるが、(一)其の物が、直に體を爲すといふのではない。物質の元素といふが如き、末端の方を立脚點とするときは、此の體と呼稱し來れる(一)も、亦之を靈と稱して可なりといふのである。要するに、一段始源的に屬するものは、之を便宜上靈と稱することを得るのであつて、畢なる(十)(一)は勿論の事、其の始源的組織たる、國之常立、及び豐雲野に至るまでは、一列に之を靈と呼稱するも、妨げなしといふべきで、獨神隱身が上記の如く、各別に記載されてある所以は、此に外ならぬ。又隱身とは、定形の個體を爲さゞる謂であつて、獨り其の眼識に上らざるの故を以て、特に之

を隠身といふのではない。

以上述べ來れるところを約言すれば、上記の神々は、降つては、靈と體とを爲すべきものであるが、其の始源的組織に在つては、體をなすべきものも一概に之を靈の神と稱する。是れ即ち獨神隠身である。而して、此の獨神隠身中にあつて、其の最も始源的なるものも、是れ亦靈と體と相待つところのものなるが故に、靈も體も、結局程度の差に依り、呼稱を別にして居る場合があることを首肯せねばならぬ。

《四》萬有の發生

獨神隠身たる神々の次に成りませる神々は、男女一對の諸神達である。男女對神といふことは、其の體なるものに、男女の別があることを示す外に、尙生成には、靈體相待つといふ原則を示して居る。靈と體と相俟つところに、所謂力なるものを生ずる。電池の靈なる(十)が、體なる(一)と相通じて、電流なる力を生ずるのと、其趣を同じくして居る。(十)と(一)の外に、電流なる力があるのではないと同樣に、宇宙間には、靈と體との結合の外に、力なるものが、別に存在して居るのではない。此くて、宇比地邇神、須比智邇神、角材神、活材神、意富斗能地神、大斗乃辨神、淤母陀琉神、阿夜訶志古泥神等八柱の神は靈體結合の力の代表神となる。力とは動、靜、引、弛、解、凝、分、合、の八力を謂ふ。此の力なるものは、始源的靈體の結合、即ち單なる(十)と(一)との結合にあつても、亦生ずること勿論であるが、靈の基本たる國之常立神、體の基本たる豐雲野神生成の後、是等力の八神が生ずとせる記述法は、寧ろ適當であると思ふ。

靈體相合して力を生じ、此の力が復靈と體とを誘引し、相倚り相緣りて元素となり、化合物となり、次で生物ともなつた。之を伊邪那岐、伊邪那美二神の生成的活動と稱す。二神活動の成果は、古事記には、可なり詳細に記載されて

あるが、今私は其の概念丈けを記述するに止めて、餘は之を他日若しくは、世の識者に讓りたいと思ふ。

伊邪那岐神は靈系の神、伊邪那美神は體系の神であつて、此の二神の親和活動といふことは、靈と體との結合を意味し、靈體結合して、此に生物を生ず。されば、此の二神の生成されたる國土、山野、河海、風雨、草木、魚鳥等、生物たる意味に於ては、皆同一である。爰に私が生物といふのは、個體相應の個體靈が存在するといふ意味であつて、此の個體靈の存在せざるものは、之を死物といふ。一體生物といふも、死物といふも、體としては、元素たることに於ては同一であつて、其の元素は、靈の（十と體の（一）とより成立すること、既に述べたる通りであるが故に、嚴密なる意味に於ては、宇宙間に死物なしとも言ひ得る。併しながら、吾人が普通謂ふところの生物死物は、此の如く嚴密なる意味に於てではなく、主として、個體相應の個體靈の存否に依つて、生物又は死

物を區別するのである。普通いふところの生死は、皆此の意味に外ならぬ。

生物死物に對する上記の定義は、伊邪那美神が火之神を生めるに因つて、遂に神避りましたとあるに依つて、明らかにされて居ると思ふ。火之神とは、所謂靈である。靈が體より分離するときに、死の現象を生ずる。之を生物死物を區別する鐵案、否神約とする。

伊邪那岐神は、御佩かせる十拳劍を拔きて、迦具土神を斬られたのであるが、其の迸れる血より八柱の神、並に其の身體の各所より八柱の神が生れられた。八柱とは、多數といふことであつて、必ずしも八柱と限定した意味ではない。即ち、伊弉那岐なる靈の神の作用は、其の靈を多數に分割して、之を生物に賦與し得るのである。

又其の伊弉那美神を黃泉國に訪はるゝや、一火を燭して行かれたのである。凡そ體なるものに、一つの火、即ち一つの靈を注加するときは、茲に生物が成

るのであるといふ原則が、此の條を見て窺知することが出來る。

然るに、之と全く反對に、伊邪那岐神が、伊邪那美神を辭去して後、筑紫の小戸に禊せられたときには、十四柱の神の生成となつた。禊とは水滌であつて、水とは、火なる靈に對する身であり、體であるが故に、伊邪那岐神なる靈が、身則ち體を得ることによつて、生成の効を遂げ得るといふ天則が、此に示されて居ることになる。此の如く、靈が主となり、體が從屬となつて生成するといふのが、原則中の原則なのである。何となれば天照大御神を始め奉り、三貴子が、之によつて得られたとあるに徴して、之を證明することが出來るからである。

伊邪那岐神は、其の神功を遂げられた後、天に登られ、日の少宮に留まられたといふことが、日本書紀に載つて居る。是れは何を意味して居るのであるか。他無し、靈なるものは、活機生々として、恒久に存在するといふに外ならぬ。私が前に靈は恒久不變の別名なりといへるは、之れあるがためである。

以上記述し來れるところを約言すれば、萬有の生成は、總て靈と體との結合に因るものであつて、靈體の結合は、爰に力なるものを生ずる。活物の心性といふものも、畢竟此の力に對する別異の名稱たるに過ぎぬ。活物より靈が脱出するときに、死の現象を生ず。然れども、靈の脱出せる、所謂死せる體も、亦一段始源的に屬する靈體の結合なるが故に、決して元來の死物といふものはない。個々の體を形成せるものに靈が加はりて、茲に生物を生ずることゝもなるが、是れ寧ろ變態であつて、靈が主となり、體を從として生物を生ずるのが、神約天則なのであるといふにある。

伊邪那岐、伊邪那美二神の活動に對する古事記の記載を研究すれば、尙ほ幾多の重要なる神律を窺ふことが出來る。男は左を掌り、女は右を掌り、夫は唱へ婦は隨ふ、過は改むるに吝なるなかれといふが如きも、其の一つとなつて居

るのであるが、此の記述の目的は、是等の問題に立入るべきにあらざりしが故に、今は之を略する。

《五》世界の統治

靈體相分れて天地剖判し、靈體相合して森羅萬象成り、萬有一切が鬱然蒸生するに至つたのは、前述の通りであつて、森羅萬象、萬有一切の基本とすべきは、之を靈の國之常立、體の豐雲野に歸す可きてある。此の基本靈と根本體とが、相親和して力を生じ、靈と體と力とが、更に複雜なる關係交渉を結び、靈が主となり體が從となつて、玆に基本的個體を有せらるゝ理想體が生成せられたのてある。別の言辭にて言ひ現すときは、男靈女體の理想神が生成されたのてあつて、开は申すまてもなく、天照大御神てあらせらる。此の理想神が高天原の主宰神とならせられたのてある。高天原とは、前にも述べたる通り、宇宙

其の物てある。古事記は、筆を天地初發の時に起して居るのてあつて、其の記述が、極東現日本に局限されて居るといふが如き、偏狹なる記錄てはない。强て眼界を小にし、偏見に拘束されて得々たる人士にあらざる限り、其の宇宙的記錄たることは、必ず首肯し得る筈てある。尤も、之を極東現日本に限られたる記錄と解せんとするのにも、多少の根據とするところがないてもない。それは、伊邪那岐神が國生みをされた、其の國々が現日本の國々と、同一の名となつて居るから、此の點のみを考察するときは、日本の記錄のやうな感がするのを、免れ得なかつたのてあらうと思はるゝからてある。特に、文化の世界的ならざりし時に於て然りてある。伊邪那岐神が生み成されたる國々の名が、現日本の國々の名と一致する點については、他に理由の存することて、他日別に論及するの機あるべきを思ひ、玆に之を略すのを便とする。

さて高天原が宇宙其物たることが、以上の如く決定され、其の高天原たる宇

宙の主宰神が、天照大御神であらせらるゝことが納得出來れば、私の論旨を進行するに於ては、最早や事足れりである」。天照大御神は、既に高天原の主宰神たることが決定せられたのであるから、今順序として、其の御神容を窺ひ奉らねばならぬこととなつた。畏くも、天照大御神の御神體は、前章に於て考察せるところの、神產巢日より豐雲野に至るまでの、始源的體であらせらるべきが故に、體の類型たる〇であらせられねばならぬこと、亦自然の結果である。而して、此の類型的體が、既に物質的元素なるものに化し了りたるものなりや否やは、尙考量の餘地を存するのであるが、此の所謂始源的なるものを細胞とせられるところの、個體であらせられたことに至つては、些の疑がない。而して、其の個體が、吾人の眼識に上り得ないところのものであることも、亦疑ふの餘地がない。斯の如き體を有せらるゝ個體に、高御產巢日より國之常立に至る、所謂始源的靈の宿れるものが、即ち天照大御神であらせらると拜察するのである。此の如き靈體を有せらるゝ神は、他にも尙多數生成せることは、古事記に見て明かであつて、唯其神々中の、靈體共に至純至粹なのが、天照大御神であらせらる。

以上述べたるが如き、靈と體とより成れる神々を、私は之を龍神と申上ぐ。須佐之男命も、亦龍神であらせらるゝ點に於ては、天照大御神と、何等相違がないのであるが、唯靈と體とが、男女相反して居る。

天照大御神と、須佐之男命の宇氣比によりて、三女神、五男神が、生成されたのであるが、此の八柱の神も、亦龍體であらせらるゝことは、爭ふの餘地がない。併し乍ら、（十と一）とが結合して電子となり、原子となり、元素となり、終に吾人の五官に感觸し得る物質となれるが如く、三女五男の神の龍體は、天照大御神に對比し奉るときは、人體化の傾向に、一歩を進められたるものとなれることは、推考するに難くない。此て、五男神中の一神たる天忍穗耳命は、

高木神、即ち高御產巢日系統の神靈と結合せられて、日子番能邇々藝命が御生れになり、人體化の傾向は、更に一段の歩を進め、天照大御神より、豐葦原水穗國は、汝知らざらん國なりとの御詔勅を受けて、終に天降りますに至つたのである。此の邇々藝命の御延長が申すまでもなく、我日本天皇陛下であらせらるゝが故に、日本天皇が、世界の一君として、地球上に君臨せらるべきことは、何等異議の存する筈がないところのものである。古來の學者は、豐葦原水穗國を、極東現日本の國土の謂とするのであるが、宇宙の主宰神であらせらるゝ天照大御神が、一島國に過ぎざる現日本のことのみ云々せられて、地球全土に對して、全く閑却さるゝといふが如きは、常識を以てしても、辻褄の合はざる甚しきもので、葦原水穗國が、現日本にあらずして、世界全體を指稱するものなること、愈明かなりと謂ふべきである。日本の臣民として、誰か此の一大記實を否定し得るものぞ、日本歷代の天皇が、治世の寶典とせらるゝところの古事記が、虛僞の記錄では、斷じてあるべき筈がない。日本臣民はおろか、世界人類の總てが、此の事實を認めない譯には往かぬ時機が、早晩到達すべきことを、私は信じて疑はない。嗚呼古事記は、宇宙創造の神の覺書である。萬類發生の順序錄である。天地大道の原則的規約である。世界人類の等しく遵守せねばならぬ寶典である。此の寶典中、現日本特有の記述と爲し得べきは、唯神武天皇東征以降に在る。此の如く、天地宇宙の大記述が、やがて日本特有の記錄と變遷し行くところに、私は、無限の興趣を感ずるものである。世の古事記を讀むの士、希くば輕々看過せざれ。

（六）餘論

日本書紀に據れば、天孫瓊々杵尊が御降臨になつてより、神武天皇御東征まで、一百七十九萬餘載であるといふ。之を人文歷史の徵し得べき、六七千年な

るに比すれば、隨分悠久なる年數である。又地質學研究の結果は、我日本國土の所々に散見する岩石は、其の成立以來少くとも數億年を經過して居るといふ。今是等の說を承認して、之より推考するときは、天地開闢といふ事の如きは、幾十百億年前であつたか、幾んど想像だも及ばざる感がする。此の想像だも及ばざる年所中に、簡單にして無にも等しき陰陽が、今の複雜なる萬有となつたのであるから、其手續を想定考慮して見たところで、或は見當違のものとなるかも知れぬ。然れども、天地開闢以來の經過を研究することに由つて、宇宙の意思、精神、神の目圖、及之がために必要とせらるゝところの制約といふ如きものを、此の裡より求むることを得るならば、人類の世界に生息する意義、使命といふものを會得して、天意神則の達成に、應分の力を致し得ることゝなる。故に、此の茫漠の觀あるを免れざる研究も、徒爾ではないことになる。況んや、我日本には、古事記其他の舊記があつて、其の大體の見當をつけ得る樣に、惠

まれてある以上、之を世界に發表して、之が指導に任ぜざるべからざるに於てをやである。私も非才を顧みず、此の如き大問題に觸れた所以は、日本國民の一員として、一毫の微ながら、其の自覺せると思惟するところのものを、捧げんとするに過ぎぬ。

何人も知る通り、古事記は、神名列記錄のやうなものである。此の神名錄が日本の寶典たるのである。加之、日本國土の全體は、官幣社、國幣社、村社、鄕社、さては各家の氏神に至るまで、殆ど神社を以て滿たされて居る。此の意味からでも、日本は神國であらねばならぬ。此の神國たる日本に於て、不思議の感に堪へぬのは、人が神といふことを口にせぬことである。口にせないばかりか、甚しきに至つては、神を口にするのを一種の恥辱と感ずる傾向さへあるやうになつた。偶神を口にするものがあると、舊陋を脫せざる迷信家として取扱ふ程にもなつた。然るに、元來神に緣が遠く、物質の本家たるべき歐米に於

て、近來頻に、心靈とか靈魂とかいふ聲が大きくなつて、神に接近せんとする傾向となつて來た。私が上に述べた問題から觀れば、此の靈魂といふものは、少しく距離の遠いものではあるが、併し、此の靈魂も亦神には相違ないから、心靈とか、靈魂とかを研究すれば、終には、私の說くところの神に到達し得ると思ふ。

靈魂研究の第一段に於て、精神作用、心理現象、暗示催眠術と稱するところのものがある。從つて是等にのみ踏躇して、靈魂問題、終には神に到達せんことを肯ぜざるものは、私には、其の本源を究めずして、唯末梢の事のみ云爲追求するものとほか見えぬ。

宇宙萬有一切は、前に數々述べたる通り、生物死物、有機物無機物などゝいうても、之を分析還元するときは、終には、(十と一)とに歸着して仕舞ふ。心理作用、精神現象などゝ稱しても、畢竟するに、(十と一)との結合たる力の發現に

外ならぬ。此の(十と一)との結合、降つて漸次複雜となり、終に個體を成すところの神となり、延いて靈魂なるものを生ずるに至つたのであるが、靈魂に對する意見は、別に之を取扱ふ事とし、爰には單に靈魂の存在といふ事を肯定して置かうと思ふ。世の學者中には、今尙靈魂の存在を否定するものがあるやうなれど、靈魂の否定は、物質までも否定することになるのであるから、私は、世の學者に、更に一段の研究を加へられんことを希望せざるを得ない。

宇宙は廣大無邊にして窮極し得ず、神靈靈魂の世界は、窈冥幽玄にして不可測である。故に私が此の問題を此に提出したればとて、大海の一粟子にも當らぬかも知れぬ。此て何等の具體的解決を爲し得べしとは、初めより期待しては居らなかつたのである。さればとて、無論好奇的に之を世に公にするのではない。唯此の問題が、識者の一考を得ば、今のところ、以て自ら足れりとせねばならぬ。(終)

大正十一年四月廿日印刷
大正十一年四月廿七日發行

定價金參拾錢
郵税金貳錢

著者　淺野正恭

發行者兼印刷者　酒井巖
東京市芝區西久保巴町三十一
電話芝二三〇七番

印刷所　酒井印刷所
東京市芝區西久保巴町三十一

不許複製

發行所　東京芝區西久保巴町三十一番地　酒井印刷所　電話芝二三〇七番

賣捌所　京都府綾部町上町　奥村常磐堂

淺野正恭稿

老子略解

定價金七拾錢
郵税金貳錢

老子五千餘言、其の數量に於ては、微々たるを免れないが、含蓄する哲理は、今日の物質學のみを以てしては、到底檢索し得ぬところのものがある。著者は多年の軍事生活上より得たる識見と、精神的生活上より得たる信念とに基づき、本書の哲理を窮明せるものである。老子の眞理は。本書の平明眞快なる解釋により、始めて之を窺ひ得べしと信ずる。眞理には古今東西の別がない。世の眞を求む事の士に一讀を薦む。

發行所　東京市芝區巴町　酒井印刷所
電話芝二、三〇七番
賣捌所　京都府綾部町上町　奥村常磐堂

393
357

終